

忠信

古名 空腹

世阿弥作

ワキ 伊勢三郎

ツレ（判官） 源義経

シテ 佐藤忠信

ツレ（数人） 法師武者

地は 大和

季は 雑

ワキ詞

「是は判官殿の御内に。伊勢の三郎義盛にて候。さても我君判官殿は。此吉野を頼み御座候ふ処に。衆徒の詮議かはり。今夜夜討うすべき事一定のやうに申し候ふ間。此事申し上げばやと存じ候。如何に申し上げ候。義盛が参りて候。

判官

「此方へ来り候へ。

ワキ

「畏つて候。

判官

「さて唯今は何の為に来りて有るぞ。

ワキ

「さん候唯今参る事余の儀にあらず。当山の者ども心がはりし。今夜夜討を討つべき事一定のやうに申し候ふ間。此事申し上ぐべき為めに参りて候。

判官

「是は誠に有るか。

ワキ

「さん候。

判官

「口惜しや我幾ばくの難を逃れ。命を重んずる事も。朝敵の虚名を晴らさん其為めなり。それに当山の衆徒夜討すべきを告げ知らする条。是れ偏へに天

の御加護なり。とにかくに我は夜に入り此所を開くべし。誰か一人留まり防矢を射。其後命を全うして。路次にて追つ付くべき者やある。義盛はからひ候へ。

ワキ「御錠畏つて承り候ふさりながら。某を始め皆いくまでも御供とこそ存じ候ふべけれ。恐れながら誰にても召し出だされて。直に仰せ付けられよかしと存じ候。

判官「それこそ我等が思ふ所なれ。さらば佐藤忠信を此方へと申し候へ。

ワキ「畏つて候。

ワキ詞「如何に此屋の内に忠信の渡り候ふか。

シテ詞「誰にて渡り候ふぞ。

ワキ「君よりの御使に義盛が参じて候。少し御用の事候へば。御参りあれとの御事にて候。

シテ「畏つて候。

ワキ 「忠信参りて候。

判官 「いかに忠信。 当山の者ども心がはりし。 今夜々討すべき事一定のやうに申し候。 とにかくに我は夜に入り此所を開くべし。 汝一人留まり防ぎ矢を射。 其後命を全うして。 路次にてやがて追つ付き候へ。

シテ 「御錠畏つて承り候ふさりながら。 某が事は何処までも御供に召し具せられ候ひて。 余人に仰せ付けられ候へ。 若し辞し申す者あらば。 其時御意をば

背き申すまじく候。

判官 「いや汝を頼む上は。 とかくの事はあるまじく候。

シテ 「御意をばいかで背くべき。 しかも一人撰まれ申し。 防矢仕れとの御錠。 弓矢取つての面目なれば。 忝なうこそ候へとよさりながら。 我君を始め奉り。 皆人々に御名残こそ惜しう候へ。

地 「不覺の涙をおさへて。 御前を立つ。 皆あはれにぞ覚ゆる。

地 「かくては時刻移るとて。く。我君を始め奉り。

門前を出で、間道より。ひそかに忍び出で給へば。

シテ 「忠信暫しは御供し。

地 「御暇申し留まれば。かまへて命を全うして。御供

に参らずは。不忠なるべし心得よと。涙を流させ

給へば。忝なしと忠信は。唯ひとり留まる心の。

便も涙なるらん。く。

法師武者一声

「吉野川。水のまにく騒ぎ来て。波打ち寄する嵐

かな。

詞

「いかに此坊中へ案内申し候。

シテ詞

「今は夜更け人静まるに。案内申さんとは如何なる者ぞ。

法師

「わりなく頼朝よりの仰せに随ひ。当山の者ども判
官殿の御迎へに参りたり。とうく出でさせ給ふ
べし。

シテ

「あらはかぐしや忝なくも。我君に思ひかゝらん

とや。よし先軍のこゝろみに。此矢一筋受けて見よと。

地「高櫓に走り上り。く。中差取つて打ち番ひ。よつ引いて放つ矢に。真先かけたる武者数多。一矢にどうところべば。目を驚かし肝を消して。一度にどつとぞほめたりける。

地「刀を抜き持ちて。く。弓手の脇より馬手の脇へ。一文字に切るとぞ見えしが。空腹切つて櫓より。

後の谷にぞころび落つ。敵の兵これを見て。寄れや者共首を取れと。一度にばつと寄り。打ち破り乱れ入り。をめき叫んで震動すれば。

シテ「其隙に忠信は。

地「其隙に忠信は。かねて用意の小太刀おつ取り。ひそかに忍び出で。茨からたち。分けつくゞりつ慕ひ行くを。怪しむる者有りて。あれは如何にと呼ばゝりかくれば。地に伏し隠れ。闇きを便に忍ば

んとするを。遁すまじと。走りかゝつて払ふと見えしが。真向破れて二つになれば。つゞく兵太刀かざし。打つ太刀を受け流し。諸膝かけて切り放し通つて。今はかうよと遥かの谷を。蝶鳥の如くに飛び翔り。蝶鳥の如くに飛び翔つて。都をさしてぞ急ぎける。